

して均整したる形を有せざるは無い。且つ草木の枝を見ても前後左右均衡を保ち、一片の葉も其中央より左右に均衡を保ちつゝ、纖維の敷き弘がるを見る。鳥獸の躰軀も均整せる者は一見快感を與へ、人體の美も鈞合の好きは最も大切なる素因となる。之に反して均整を失ふときは不整形となつて美を損する。例せば草木が風害の爲に其枝を折られ、動物が負傷の爲に不具となりて均整を失ひ、其美を損するが如くである。

不均整と醜

海鼠や駱駝は甚だ醜き動物であるが、麒麟は四肢の長さに準じて頸も長く、美き動物である。人間にありても頭部のみ大きく身長之に添はぬ福助や、肩幅と身長と同じ位肥え過ぎた男などは見よくない。況や鼻缺け、口歪み、一眼小なるが如きをや。

佛畫の均整

十二、宗教美術の特色。宗教上の美術は特に此均整に注意してある。佛像に兩脇士を添へたるは此均整を傳へたが爲である。十六羅漢の圖、十三佛の圖、三尊佛の圖、五如來の圖、諸種の曼陀羅等皆甚しく均整を以て畫かれ、單調の弊に陥るほどである。

佛の圓滿

佛の三十二相八十種好も身體の鈞合よく圓滿に發達したるを意味してゐる、されば佛心も亦悲智圓滿、智徳具足で、精神的能力が鈞合よく發達した者としてある。我禪門にありては人々皆智徳具足の佛と成り、人生を此儘淨土たらしめんとするが理想である。以上の見地より現代の社會を觀れば頗る改造を要する點が多い。今其一二を言うて見やう。社會の中央機關たる政府が過大なる權力を有して多數人民の意志を壓迫し、彼等をして自ら無能無力

醜なる社會

の感を懐かしむるは、恰も福助が頭部のみ大きくして身長之に添はぬと同じで、已甚だ醜いものである。中央集權政府萬能は到底美的 人生觀と相容ることとはできぬ。現代の教育制度によれば中産以下の人民は決して高等教育を受けることはできぬ、否中産以下の子弟は中學教育さへ受る者は稀である。これ知識が有産階級の爲に獨占せらるる傾向で、極めて望ましからぬ趨勢である。智識の普及は人類向上の第一歩であるに、中産以上の人に知識を獨占せられて、多數の蒼生が精神的向上の機會を失ふは實に憐むべきである。之を譬ばへ身體の上部のみ大に發達して下部の全く發達せざる人の如く、甚だ見苦しき社會狀態である。

十三、中庸の美。美は中庸を得るを要す、換言せば美は極端を避

全教育の不完

中庸の美

けねばならぬ。色の上にて言へば赤毛布の色は極端に赤くして野蠻人の嗜好には適すべきも、決して美なる色とは思はれぬ。之に反して薔薇の色や櫻花の色は中庸を得て非常に美しい。老松の緑と新柳の緑とを比較すれば前者の極端なるより後者の中庸を得たるが美しい。同様に黒漆の光るよりも光澤消の穩かなるが美しく、金剛石の輝くよりも人の顔の白い色が却て美しく見ゆる。形の上にて言へば天狗の鼻は高きに過ぎ、御福の鼻は低きに過ぎ、これ決して美なる所以でない。鼻に就て想ひ起したのは古來達磨を描く人が多く甚しき獅子鼻を達磨に附してゐる。達磨は碧眼の胡僧と謂はれて、今の西洋人のやうな眼の碧い、アリアン人種であつたに違ひないから、其鼻柱は寧ろ高く、小鼻は小さく、一

達磨の畫

假想的の畫

種の威嚴あるものでなくてはならぬ。しかるに畫工が皆日本人の鼻の中、最下等の獅子鼻を以て達磨を描くのは非歴史的で、非美術的である。惟ふに達磨の繪に達磨の歴史的人格に相應したものは殆んど無く、人間に酷似した化物の繪となつてゐる。天狗とか龍とか、天女とかいふ假想的のものなら、畫工が空想を縦にして描いても宜いが、達磨の如きは歴史的人物であるから、人三化七の畫では達磨にはならぬ。殊に達磨の繪に極端なる描き方の多いのは美を破ること甚しい。

日本婦人の庇髪は少しく大に過ぎ、西洋婦人の帽も亦過大の傾向がある。腰は細きを貴ぶと雖も、コルセット腰は却て美に害あり、日本婦人の腰は、極端に廣き帯によりて餘りに太きに過ぐ。中肉

曲線と直線の調和

中脊を以て美人の必要條件とするは正に中庸を貴ぶからである。曲線と直線とも程よく調和するを要する。葉の落ち盡したる林、羽毛の脱け落ちた鳥獸、全身の裸體など何れも曲線が多きに過ぐ。草木には相應の葉や花があり、鳥獸には之に適したる羽毛があり、人には其れ相當の衣裳のあるが美しく見える。これ曲線と直線との中庸即ち調和に由るのである。

佛教の中道

十四、宗教と社會との中庸。宗教も亦中庸を貴ぶ、釋尊が兜率天より中夜に神を降して中國に生れ中道の妙理を説かれたといふ傳説があり、從て三論宗には八不中道、天台宗には空假中觀とあつて佛教各宗一として中道を貴ばざるはない。就中曹洞禪にありては五位即ち正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到、何れも中の一字

を以て貫徹してゐる。一言以て之を蔽へば極端に奔らざる所に
宗教上の眞理があるのである。

社會の低氣
壓

社會の事も之と同じで成るべく中庸を失はぬやう經營せねばな
らぬ。機械的文明の進歩は貧富の懸隔をして甚しからしめ、極端
なる富豪と極端なる貧民とを生ずるに至つた。是れ社會の大空
に高氣壓と低氣壓とが起つたので、暴風豪雨の襲來するは止むを
得ざる勢である。青天白日なる社會の平和は貧富の中庸を恢復
するより外に方法はない。殊に社會中庸の美を破る者はトラス
トで巨大なる資本を有する會社が同業者を買收兼併して、競争を
絶滅し、專賣的の猛威を逞うするは最も惡むべきである。

美と清淨

十四、美觀と清淨。美は清淨なるを要する、不潔は美の敵である。

健康は美の
本

猫や犬の毛に泥が附着したり、美人の手や頸に垢が見えたり、男子
の髭の尖に澆や飯粒がついたのは其美を破る所以である。清淨
は健康と伴ない、不潔は病癩と伴ふもので、草木にあれば鳥獸にあれば、
其健康を損ずるときは直ちに枝葉に生色を失ひ、羽毛に光澤を減
じ、害蟲之に寄生して、愈不潔となる。然れば人間にありても健康は
美の本と謂ふべく、如何なる美人も病魔の爲には一朝にして見る
影もなき姿となる。是を以て其美の保存に腐心する婦人が専ら
化粧と裝飾とに依頼し、甚しきに至ては手足の美を損ぜざるため
に、適度の仕事さへ忌む者があるのは以の外なる心得違と謂はね
ばならぬ。清潔を旨とし、衛生に注意し、運動を怠らず、生氣を充實
するは美の保存上極めて大切である。

婦人の謬見

清淨と道德

また清淨と道德とは常に聯想せらるるものであるから、不徳の行爲は醜惡の感を惹起する、されば如何なる美人も悖徳の行あるときは美人の資格を失ひ、醜婦の如く思はるるが常である。且つ罪惡は其犯人の容貌を醜怪ならしむるは事實である。犯罪人が先天的に怖るべき容貌を有するは、學者の一致する意見であるが、又一方より之を見れば犯罪が後天的に人の容貌を醜惡ならしむるも亦事實である。

罪惡と醜汚

佛身清淨

十五、宗教道德の清淨。宗教が清淨を貴ぶことは言ふまでもない。神は汚れを受けず、齋戒沐浴して神に祈るは之が爲である。佛教にては佛身を清淨無比なる者とし、如來清淨妙色身 普現十方無有比

と華嚴經にあり、又

佛身清淨皆樂見 能生世間無盡樂

と同經にあり、又

永離世間憍慢惑 是故其身最嚴淨

淨土の善美

など枚擧に違がない。基督教にあれ佛教にあれ回教にあれ、其天國又は淨土は皆清淨無比としてある、淨土にありては其陸地も湖水も園林も鳥獸も、一として善美を盡さざるは無いというてある。吾禪門にては自性清淨心と稱して吾々御互の心の本性は清淨にして一點の汚れもないというてある。王陽明も亦禪學より此義を採用して良智の説を立てた。禪に所謂自己心性の光明と王學に所謂良智の發揚とは全く同一に歸する、陽明が、

自性清淨心

去年中秋陰復晴 今年中秋陰復陰

百年好景不多遇 況乃白髮相侵尋

吾心自有光明月 千古團圓永無缺

山河大地擁清輝 賞心何必中秋節

と吟じたのは、盤山の

心月孤圓光含萬象

の語と殆んど同じで、後者の却て簡勁なるに及ばぬ。

私娼公娼

十六。社會の不潔物。社會にも幾多の不潔物がある中、私娼公娼は其最も甚しき者である。今日の文明國に私娼の多いことは實に驚くばかりである。一にも二にも西洋崇拜なる基督教徒の中には西洋には全く娼妓は無いやうに盲信してゐる輩もあるらし

娼業の不潔と不徳

いが事實は決して左様ではない。私娼の害毒は却て西洋が吾國よりも甚しいかも知れぬ。それは且く措いて娼業の繁昌は社會の健康と相容れず、婦人の清操と相容れず、道徳の向上と相容れざる者である。娼業の盛なると共に酒食の浪費も必ず伴うて起る。不經濟、不養生、不徳義、不生産の四大悪結果は娼業より生ずる。親が一時の窮厄を免るるために其女を賣り、子が其父兄の貧困を救ふために其身を賣るが如きは舊思想家の許す所なるも、吾人は之を以て背徳の行爲として非難するに踴躍せぬ。況や妓樓の主人及び其幫助者に於てをや。親が其子を賣るは野蠻時代の遺習で、花猫が其子を食ひ、蠻人が子女を賣買すると一も擇ぶ所がない。子が甘んじて親の爲に其身を賣るも大に誤れる事、之によりて

親を禽獸に陥れ、且つ父母のみの安逸を計りて、社會多數の人に害毒を及ぼすは言語道斷の悖理背徳と謂ふて差支ない。果して然れば人生の善美を希望する者は是非公私の娼業を撲滅すべく努力せねばならぬ。

當世縉士の 不徳義

されど單に娼業に關係する人人のみを責むるは片手落の沙汰である。縉士とか縉商とか稱する輩にして藝娼妓を弄ぶ者は極めて多い、彼等は社會の不潔物を啖喫ふ蒼蠅である。此等の蒼蠅は自ら藝娼妓たる不潔物を食ふのみでなく、手脚に不潔物を携帶して温泉、避暑地、海水浴、別莊地と四方八方に有毒微菌を撒布する。道徳的制裁と稱する蠅打がなくては始末にゆかぬ。殊に政治家にして數々其名を新聞に掲げらるる人人が演ずる蒼蠅的行爲は惡

病の流行を來すが故に速に其公的生涯を奪ひ去らねば其影響する所測るべからずである。

美と無限

色彩に於ける無限

十七、美の要素としての無限。美には無限てふ要素がある。庭園の奥深くして其限りが知れぬやうに作られたるは頗る雅致がある、又畫にありても眼の及ばん限り奥深く見える山水など、一種特別の趣がある。色彩に就て謂へば、甲の色より乙の色に變る間に無限の度があるのが美の要素となる。例せば黄葉を見るに綠より黄に、黄より紅に變ずる間に無限の度が見える。詳言せば葉の本は綠でそれより少しづつ少しづつ次第に黄ばみて遂に全く黄となり、其黄が亦少しづつ少しづつ赤みを帯びて尖端に至つて全く赤となる所に謂ふべからざる美が存する。虹の色の如きは

赤黄紫等の色が次第に相混じ相並んで、無限に變化して眼の覺むるやうな色となる。

人の顔面にて謂へば頬の色、白いのが次第に變じて少しづつ赤みを帯び、中央に至りて薄紅色となる。此間に無限の度があつて美を形成する。又眼の表情には無限の變化があるから、人の顔面中最も美しいものである。形の上にも之と同様に曲線の度に無限の變化があつて種々の美しき形體となるのである。

無限と詩歌の餘韻

詩歌の上に応用して謂へば餘韻のあるものは特に美觀を深くする、餘韻は何となく無限に見ゆるからである。

思ふこと積みては崩す炭火かな

といふ古句の如き、何を思ふとも謂はず、何を哀しむとも言はず、只

炭火を積みては崩し、崩しては積むと叙したる所に餘情の限りなきを覺ゆる。又

夏やせと答へてあとは涙かな

といふは唯夏やせと答へたのみで他に一言も謂はぬ所に胸中無限の苦痛を含ませて餘韻の嫋々たるものがある。

宗教と無限

十八、宗教と無限。完教信仰の目的物たる神佛は無限者、絶極者である。華嚴經に佛の廣大無限なるを形容して、

汝應觀佛一毛孔 一切衆生悉在中

といひ、又

佛眼廣大無邊際 普見十方諸國土

といひ、更に恒久の存在なるを示して、

如來不出世 亦無有涅槃

と道破し、又其力の無限なるを説いて、

總持邊際不可得 辯才大海亦無盡

福德如空無有盡

人生無限の
渴望と宗教

というてゐる。蓋し無限を渴望するは人性の根本的傾向で之を如何ともすることはできぬ。此無限の欲求を満足するものは無限者、絶對者でなくてはならぬ。

美と生命

十九、美の要素としての生命。砂漠の荒洪たる風景は堪ふべからざる不快の感を惹起する、井は生氣の存するものが無いからである。月雪の美は雅客の常に稱する所であるが、如何にせん生命の無いため、寂寥の身に逼るを覺ゆる。されど雪中の紅梅、又は雪

生命は美の
本體なり

中の福壽草は、單に雪のみの美と比較すれば百倍も千倍も快感を催ほす。しかし庭前の紅梅のみでなく、更に黃鳥の之に來るあらば一層の感興を生ずるに相違ない。公園に遊ぶとしても、水石の美なるあり、佳艸名木の見るべきあるのみでは何となく物足らぬ。水には魚の躍るあり、岩には龜の伏すあり、樹下には鹿の遊ぶあり、芝生には、小兒の戯るるあらば、此上もない。山水の美も可なることは、便ち可なれども、之に牧童の牛に跨りて、夕陽を帯びて歸るあらば一段の妙がある。老年よりは少年が美しく、泣顔よりも笑顔が美しいのも同じく生命の横溢たると否とに歸因するのである。生命の減退は美を消滅せしむる、顔色憔悴、形容枯槁では一向に美しくない。附贅懸疣で、瘡だの疣だの腫物だの痣だの病的の徴を

呈する時は美は滅殺せらるる。されば生命は美の本體と謂はねばならぬ。

宗教、仰の
目的物

二十、宗教と生命。宗教信仰の對象は無限者絶對者であると同時に大生命であり、大活靈である。佛は宇宙的大生命で、一切の生物は皆佛の生命を受けて生れ佛の靈機を受けて活動しつつある、換言せば佛の子である。涅槃經に

譬如阿耨達池出四大河如來亦爾出一切命

とあつて、一切の命ある者は皆如來より出たと示してある。吾禪門に於ても、楊岐山の甄叔は

群靈一源假名爲佛

というて、一切群靈の本源が佛であると明言した。吾々御互は本

宇宙の大生
命

來此宇宙の大生命たる佛より現在の生命を得たものであるから、絶えず佛の如くならんとする欲來を有してゐる。开は第一吾々の生命は有限であるに拘はらず、無限に生きんとする欲求をもつこと、第二に吾々の生命を子孫に傳へて無限に繁殖せんとする欲求をもつことと知れる。此二の根本的欲求は人間のみならず一切生物の通有性である。蟬蛸の如くはかなき生命を有しながら、絶えず無限の生命を欲求するは如何にも不合理の如くであるが、吾人の生命が無限の大生命たる佛より出て、其本源の如くならんとする性向を示すのであるとすれば、毫も性むに足らぬ。

宇宙の大觀
二十一、美と宗教の大觀。美と宗教とは宇宙の事物を大觀するより起るもので、學術の如く分析的に究明したり論證したりする

ことはできぬ。月雪花を觀て美なりとし、山紫水明を觀て美なりとするは、月球の成分を研究したり、月光の由て來る所を審査したり、雪片の形狀を検したり、花瓣花萼を分析したりして美を感じるのでない、只皎月の玲瓏たるに對し、六花の繽紛たるに對し、百花の爛漫たるに對し、全體を一度に大觀して、事物の神に觸れ恍惚として其美に酔ふのである。故に何故に美であるか、何故に美と感ずるかを論證することができぬ。宗教も宇宙人生を大觀するより起るもので、宇宙人生の分析的研究の餘に成るものでない。宇宙人生を大觀して、崇高なる或者の存在を信じ、無限なる或者の實在を信じ、絶對なる或者の三才を貫いて存することを信ずるのである。吾禪門に於ては、這個の一物が即ち吾人の心體であり、同時に

宇宙人生の大觀

六合に亘る大精神、大生命であると直觀するのである。

結論

二十二、結論。之を要するに宇宙間に美を顯現する所の根柢は

人生に宗教を形成する所の根柢と同一實在である。而して美の要素と思惟せらるゝ者は、當該實在の象徴に外ならぬ。されば美の要素たる均整は、萬有齊一の天則で、造化の公明正大なる徳を表し、佛の福德圓滿なる徵證となるのである。次に美の要素たる中庸は、造化の温雅和平の徳を表し、佛の温健中正なる徵證となるのである。又美の要素たる清淨は、造化の純潔清白なる徳を表し、佛の純善清高なる徵證となるのである。復次に美の要素たる無限は、造化の恒久不變なる徳を表し、佛の靈光無量なる徵證となるのである。最後に美の要素たる生命は、造化の靈活無比なる徳を表

し佛の靈通自在なる徵證となるのである。

(大正六年十一月廿六日草)

此經雖_レ然無_二文字_一

八萬法門皆揭示

展則量包_二大千界_一

卷_レ之不盈_二方寸地_一

呆 菴

第五章、禪の佛陀觀と道德の大本

佛は宇宙的
大心靈たり

一、禪の佛は宇宙的_二大心靈_一なり。禪門に所謂佛とは絶對_二心靈_一とか、宇宙的_二心靈_一とか、宇宙的_二大生命_一とかいふべきもので、起信論に説く所の總該_二萬有_一の一心と異名同體と見てよい。しかし佛は名くべからず象るべからざる本體_二第一義諦_一であるから、心とも、靈とも、物ともいふことはできぬ。故に古人は其諱を犯さずして、單に一物と稱して、

昭々靈々た
る一物

有一物昭昭靈靈 不生不滅

というたり、また

天地を拄ふ

有一物上拄_二天_一 下拄_二地_一 黒如漆 過在動用中 動用中收不得

というたり、また

有一物無頭無尾 無名無字 無背無面

というたりしたのである。詳言せば茲に一物があつて不生不滅無始無終の存在で、元より青黄赤白等の色を以て之を辨ずることはできぬ。されば黒きこと漆の如しというて一色無雜で、相對的のものでない。又此一物は無形無影の靈體で、頭尾面背の見るべき姿がない、強いて現象界の事物に擬へて謂へば、日月の如く昭々たり、心神の如く靈靈たる者と稱してよい。此一物たるや上は天を柱へ下は地を柱へて、常に萬有の活動中に露れてゐる。しかし萬有の活動中に其全體を收め盡すことはできぬといふのである。

二、即心即佛。禪門には即心即佛といふ有名な語がある、其所謂

佛は萬有に
遍在す

即心即佛

心とは吾等の惜しい欲しい、憎い可愛の心が直に佛であるといふのではない。承陽大師が「即心即佛と謂ふと雖も心猿意馬是れ佛なるにあらず」と謂はれた如く欲望に驅られ、誘惑に引かれて東西に狂奔する吾人の心が佛である筈はない。即心即佛の心とは萬有を總該する心を指すので三才を貫通する靈妙不可思議の心を佛といふのである。

三才を貫通
する妙心

三才を貫通する妙心は一切の處に遍満してゐるから吾人の心も亦其妙心の一部であつて、佛心の外に吾人の心が別に存在する譯でもない。此佛心と人心との關係は頗る理解し難い問題の一端あるから譬喩を以て大略を辨じやう。佛心は宇宙的なる無限の心、人心は個人的なる有限の心である、されば佛心は地球を周流す

佛心人心の
關係

無限の水の如く、人心は井戸の水の如くである。井戸の水は地球を周流する無限の水が井戸の中に湧き出たのである。元は無限の水であるが井戸の水となれば有限である、有限であるが無限の水と即して一である。佛心の無限なる者が吾人の心となつて有限化せられる、有限化せられるけれども、無限の佛心と即して一である。

三、心とは佛の別號。かくして心といふも佛といふも同一であるから、古人も

心者佛之別名

心者佛之別名則有百千異號體唯其一

というてゐる。果して然れば宇宙的心靈たる佛は宇宙の妙諦天地の太原で上は日月星辰より下は禽獸蟲魚に至るまで皆悉く其

佛名の由來

妙徳に依て存在し、其妙力に依て化育せらるるのである。故に其徳たる無量無數で言語思慮の及ばざる所である。

かく無量無數たる佛徳の一を擧げて名けた者が即ち佛名である。例せば阿彌陀佛の如きはアミターユスなら無量壽で佛の無始無終たる恒久的存在を表する名であり、アミタブハなら無量光で佛の無量なる光明を表する名である。何れにしても佛徳の一を擧げたに外ならぬ。此外大日如來、彌勒佛等種々の佛名があるが、皆佛の無量無數なる妙徳の一を擧げて名けたもので阿彌陀大日、彌勒等と一々別々の佛があるのでなく、宇宙に唯一佛一體の佛あるのみである。圓覺經には

宇宙唯一佛

十方如來同一法身一心一智慧

とあり、華嚴經には

一切諸物
一法身

一切諸佛一法身

と説いて、一切の諸佛というて一々別々に數多の佛があるのではなく、一身一心一智である。

佛徳の擬人

四、菩薩は佛徳の擬人なり。宇宙には一佛一體の佛あるのみでない、文珠菩薩とか觀自在菩薩とか種々の菩薩なるものも亦皆本佛の妙徳を擬人した者で、佛を離れて文珠觀音等があるのではない。文珠觀音等の菩薩は歴史的人格ではない、馬鳴菩薩龍樹菩薩などは印度人で歴史上の人格であるが、文珠や觀音は同日に論ずることはできぬ。蓋し宇宙的心靈たる本佛はあまりに高大であまりに超人格的で、あまりに超絶的であるから小根小智の凡夫に

文珠普賢觀
音の由

は感見するに困難である。そこで本佛の一徳を人に擬へて親み易く拜し易くしたものが即ち菩薩である。例せば文珠は本佛の智慧を擬人し、觀音は本佛の無縁の大悲を擬人したに過ぎぬ。以上は吾人の私見ではない、禪門に有名なる長沙の語録に、

問曰河沙諸佛、體皆同、何故有種種名字、長沙答曰 文珠是佛妙觀察智、觀音是佛無緣大慈、普賢是佛無爲妙行、三聖是佛之妙用、佛是三聖之眞體、用則有河沙假名、體則總名一薄伽梵

と明々白々に道破してある。さすれば文珠觀音等の菩薩を禮拜するは本佛以外の菩薩に歸依するのではなく、佛徳の擬人たる菩薩を通じて佛を禮拜するのである。

佛心平等

五、佛心は平等心なり。却説此宇宙的心靈なる佛と吾々一切衆生との關係は謂ふまでもなく親と子、本と末、源と派との關係で一切衆生皆佛の子として佛心を以て本心とし、佛性を以て本性としてゐるのである。佛心は本より絶對心であるから現象界の語を以つて之を言ひ現はすことはできぬ。しかし佛心を且らく人間的に寫象して見れば、平等心、慈悲心、清淨心、眞實心、大覺心等で、涅槃經には佛心を形容して、

如來慈母育衆生 普飲衆生大悲乳

是如來

といひ、また

父母即慈 慈即是如來

と説いてある。先づ佛心が平等公平なることは天地間の萬有が

天惠萬物に及ぶ

何物も一長一短あり

皆平等に佛恩に浴して一物も之を私に占有するを許さない事實によつて知らるる。エマアソンが嘗て其著報償論中に詳説した如く、美華ある草木は醜果を結び、美果を結ぶ草木は醜華を開く、好聲の鳥は其羽翼の美を滅殺せられ、羽翼の美を具ふる鳥は其音聲の美を滅殺せられ、前肢を有する動物は羽翼を失ひ、羽翼を有する動物は前肢を缺く、角ある者に牙なく、牙ある者に角なし、熱帯は天與の産物自然に豊饒なれば従て毒蛇惡獸の害多く、寒帯は天賦の産物少ければ従て惡疫瘴毒亦少く、各一長一短ありて何物も善美を壟斷するを許さぬ、これ宇宙的心靈の平等公平なる一端である。人生のこともこれと同様、妻を娶るの喜びあれば姑嫁不和合の哀みあり、子を生むの樂みあれば生活困難の苦みあり、立身出世の榮

人生の禍福

えあれば責任重大の歎きあり才子は多病にして美人は薄命善く泳く者は溺れ善く馬に乗る者は落ち好き花は散り易く好き木は伐られ易く眼ありて能く山水の勝を観る者は醜劣不快の物をも見ざるべからず鼻ありて能く芬香を嗅ぐ者は兩便所の臭氣をも嗅がざるべからず。これと同じく善因に樂果あり惡因に苦果あり打つ者は打たれ人を殺す者は殺され人を誑ば穴二つ虎穴に入らざれば虎兒を得ず一時に益あれば一時に損あり惡錢は身につかず天に向て唾すれば其面を汚す。惡人勢を得るも狗の堂に昇るが如く其位に安んずる能はず善人世に用ひられざるも魚の水に在るが如く泰然自得するを得。佛心の一切の者に對して平等公平なる是の如くである。

因果相償

六、佛心は慈悲心なり。次に佛心は慈悲心である、這は宇宙萬有の生々化育の上に之を看取することができる。涅槃經に

如來常爲一切衆生而作父母

と説いてある如く萬有は佛の靈徳に化育せられて生々發展しつつある。されば一切の生物は皆無限の繁殖力を有してゐる。コロンバスが米國發見の第二回目の航海の時、サンドミンゴ島に僅か二三頭の牛を放つたのが二十六年の後には非常に繁殖して四千頭八千頭位の牛群が各處に見出さるゝに至つた、此牛をメキシコに移したるに、ここに亦非常なる勢を以て繁殖し、千五百八十年代にはブエノスアイレスのみにても千二百萬頭を算するに至つた。牛の如き繁殖力の弱い動物ですら是の如くである。鱈

生物の無限なる繁殖

の如く一度に千萬粒以上の卵を産む魚にあつては其生育を妨ぐる事情が無ければ世界の海洋を充填すること洵に易々たるものである。ハクスレイは一個の植物が年々五十の實を結ぶと假定して其の實が地球上如何なる處にも都合よく繁殖するものとし且つ一本の植物に一平方呎の地面を要するものと假定する時は僅に九箇年にして地球全部に充滿することを立證した。其計算は左の如くである。

50
2,500
125,000
6,250,000
312,500,000
15,625,000,000
781,250,000,000
39,062,500,000,000
1,953,125,000,000,000
1,421,798,400,000,000
<hr/>
531,326,600,000,000

一個の植物に
九箇年の植
全箇年の植
充て全箇年
定に九箇年
算球に

ハクスレイ
の議論

$1 \times 50 =$
$50 \times 50 =$
$2,500 \times 50 =$
$125,000 \times 50 =$
$6,250,000 \times 50 =$
$312,500,000 \times 50 =$
$15,625,000,000 \times 50 =$
$781,250,000,000 \times 56 =$
$39,062,500,000,000 \times 50 =$

即ち第一年には五十本の植物、第二年には二千五百本の植物、第三年には十二萬五千本の植物、第四年には六百二十五萬本の植物乃至第九年には一九五三、一二五、〇〇〇、〇〇〇本の植物となる。そこで一本の植物に一平方呎の地面を要すとせば、地球陸地の面積は一、四二一、七九八、四〇〇、〇〇〇、〇〇〇平方呎であるから、

差引五三一、三二六、六〇〇、〇〇〇、〇〇〇平方呎だけ不足を告げるといふのである。

唯物論者の言

かく萬物の生々化育して無限なるを宇宙的心靈の慈悲と觀るのである。唯物主義にして進化論者なる故加藤弘之氏は生存競争の慘憺たるを力説して宇宙は生々の氣に充つるにあらずして殺殺の氣に充たされてゐると論じたが、這是死が生の爲に存するを看過した僻論と評してよい、生物は死によりて其生命を新たにするのであるから、死は生命の斷絶を意味するものでなく、生命の發展を意味するものと見ねばならぬ。しかし此問題は非常に複雑した論題であるから今は略して擱く。

死は生の爲に存す

佛心眞實

七、佛心は眞實心なり。次に佛心は眞實である、此點は極めて容易

に看取することができ、即ち上は日月星辰より下は砂礫塵埃に至るまで、一として眞實ならざるはない、花の紅なるは花の眞實、柳の緑なるは柳の眞實、火の熱する水の濕ふ、何れか眞實ならざるものがあらう。されば人間も亦本來眞實なる性質を有してゐる。人の誠なるは、草の緑なるが如く、空の蒼きが如し

天眞地實人誠

と古人も言つた。眞實は人の自然の性情であるから、眞實に語り眞實に行ふには少しも心配はない、之に反して偽を構へるには非常に努力を要する。之を要するに天は眞地は實、人は誠、これが三才の特色である。

佛心清淨

八、佛心は清淨心なり。次に佛心は清淨心である、清淨とは謂ふまでもなく、汚染を離れ醜陋を脱したる形容で、宇宙的心靈の高雅

宇宙美觀

優美なる作用をいふ。此高雅優美なる作用によりて萬象は整齊せられ、莊嚴せられて、天然の美觀を呈する。されば蒼空、白雲、皎月、明星、紅霓、彩霞、山紫、水明、柳綠、花紅等の無情美より、燕歌、蝶舞、禽語、蟲聲、明眸、皎齒、傾城、傾國の有情美に至るまで、皆此清淨心の露現ならぬはない。

佛心大覺

九、佛心は大覺心なり。次に佛心は大覺心である、佛心には一點の疑迷もなく、常に惺々、晃々として照さざる所なく、鑑みざる處はない。大覺心は迷妄を離れてゐるから、過誤錯謬に陥らぬ。因果の大法が千古萬古長へに變らず、自然の法則が盡未來際不變不易にして、毫も誤錯の虞がないのは、宇宙的心靈の大覺心たるを表してゐるのである。

佛心不思議

佛心は不思議なれば、到底吾人の凡慮を以て其真相を究盡することはできぬ。しかし佛敎に説く所に依て、其一斑を揣摩すれば、上述の如く平等心、眞實心、慈心、清淨心、大覺心等と觀らるゝのである。而して一切衆生が皆佛より生命を賜はりて生れ、佛の心を心として佛の子である以上は、佛心と人心とは即して一であらねばならぬ。即ち宇宙的心靈は吾人の本心に即し、吾人の本性は宇宙的心靈の本質と即して一である。證道歌に

諸佛法身入我性 我性還與如來合

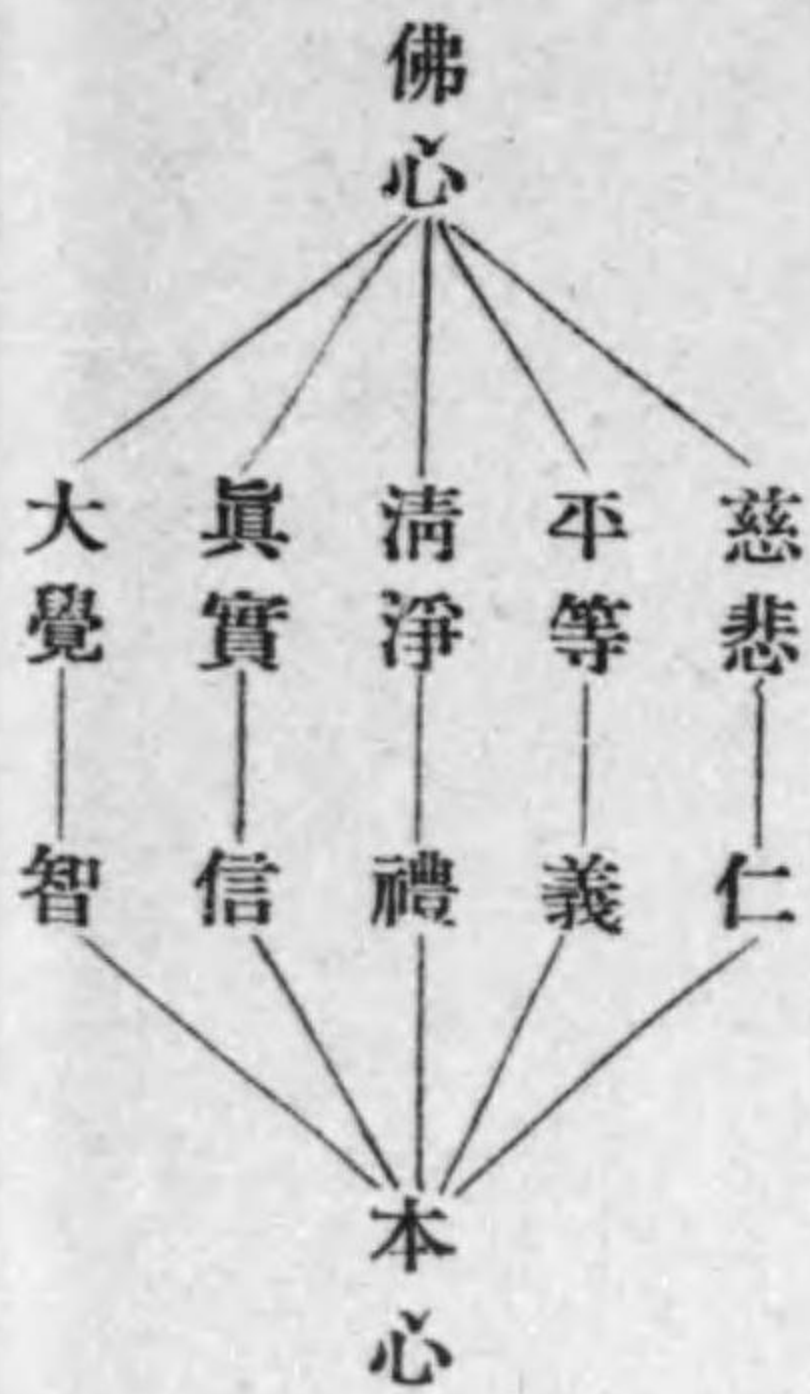
佛心人心即

とあるは此意に外ならぬ。されば佛心は吾人の心に入りて本心となり、吾人の本心が宇宙に徧滿して佛心となるのである。此本心は佛心と同じく平等、慈悲、清淨、眞實、大覺等の美德を具へ、人生の

道德とは何ぞ

百事に當りて其美德を發揚する之を稱して道德といふのである。例せば吾人の本心を以て親に事ふる之を孝と謂ひ、本心を以て君に事ふる之を忠と謂ひ、本心を以て夫に事ふる之を貞と謂ひ、本心を以て兄に事ふる之を悌と謂ふ。孝悌忠信仁義禮智等の徳行は皆悉く本心が人事に應じて發揚する効徳に外ならぬ。今假に道德を略して仁義禮智信の五として佛心人心相即の圖を作れば左の如くである。

佛心人心相即の圖



佛心は諸徳の大本なり

上圖に於て見らるゝ如く佛の慈悲心が吾人の本心に具はつてゐて、其本心が他人に對して働く時に仁の徳となる、同様に佛の眞實心が吾人の本心に具はつてゐて、其本心が他人に對して働く時に信の徳となるのである。さすれば所有道德は本心に統合せられ、本心は其源を佛心に發してゐるのである。詳言せば仁愛は吾人の本心の妙用であるが、其本心たる畢竟佛心の慈悲の現れたるものに外ならぬ。更に換言せば吾人が仁愛を行ふは吾人の本性に準するので、同時に宇宙生々の化徳に發するのである。又吾人が誠信を主とするは吾人の本性の然らしむる所であるが、同時に宇宙眞實の妙理に合するのである。故に道德の大本は本心本性にして道德をして權威あらしむるものは、宇宙的心靈即ち佛である。

天人合一

十善

十、十善の略説。普通佛教に十善と稱する徳目がある、之を圖示すれば次の如くである。

不殺生	慈悲	對他生物
不偷盜	正直	對他所有物
不邪婬	貞潔	對他妻妾
不妄語	信實	對他言語
不飲酒	節制	對誘惑物
不自讚	謙讓	自他比較
不毀他	寬恕	對他缺點
不說失過	寬恕	對他缺點
不貪	淡泊	對財色食
不瞋	大度	對不可境
不癡	聰明	對一切事

佛心

本心

自律的道德

一心萬徳を具す

ここに不殺生とは殺生を禁遏するの義ではない、本心が他の生物に對して慈悲の徳を現はすを謂ふ。然れば惡を懲し罪を罰し又は極惡非道の人を殺して諸人の禍を除くが如きは正に大慈悲で、不殺生戒に合するのである。我禪門に於ては不殺生等の諸戒を皆一心にありと説く、并は上圖に示す如く一個の本心が他の生物に對して働く時は慈悲、即ち不殺生の徳となり、同一の本心が他人の所有物に對して働く時は正直の徳となる、乃至貞潔も信實も節制も謙讓も寬恕も淡泊も大度も聰明も、一心の事物に應じて働く妙用に名づけたものである。是を以て十戒皆一心に具備してゐる。唯十戒のみでない、二百五十戒も、五百戒も、三千の威儀、八萬の細行皆悉く一心の効徳に外ならぬ。而して其一心は宇宙的心靈

道德は天地の徳なり

其物の露現したのである。之を要するに我禪門に謂ふ所の道德は社會生活上の利便の爲にする道德でなく、人間の本性上爲さざらんと言ふも得べからざる行爲で同時に天地と其徳を合し、日月と其明を同うする宇宙的心靈の活動なのである。

受戒人位

十一、受戒入位。曹洞教會修證義には此點を受戒入位と説いて、吾人が佛戒を受持する時直に佛位に入るといつてある。何となれば佛戒は本心の妙徳で、本心は佛心と即して一であるから、本心の妙徳が圓滿に發揮せらるゝは即ち佛の妙徳が圓滿に活動するのである。

吾人の本心は法性の源底に透るといつて、宇宙的心靈と相感應するのである。譬へは掘貫井戸の水は地球を周流する無限の源泉

より出でるが故に、自然に湧出して、之を止めんとするも止むべからざるが如く、吾人が精神の奥底にある本心より迸出する道德的行爲は宇宙的心靈が吾人を透して活動するのであるから、吾ながらも之を止めることができぬ。

かくすればかくなることを知りながら

やむにやまれぬ大和魂

大和魂

で如何にしても止めることができぬのである。

源義經の妾

十二、歴史的事實。古來歴史上有名なる源義經が妾、靜に關する物語の如き能く之を證明してゐる。源九郎伊豫守義經は平家を征服して大功を樹てたにも拘はらず、頼朝の猜忌に觸れ、謀叛人の名を負はせられて、日本六十餘州廣しと雖も身を容るに地なく、吉

野山の奥深く逃げ入り、愛妾静とも袂を別たねばならぬまでの窮境に陥り、止むなく若干の金を静に與へて下郎を伴として落行しめたるに伴の下郎は悪心を起して、静より金を奪うて逃げ失せたので、静は山路の雪に踏み迷ひ、辛苦艱難辛うじて都の邊に彷徨ひ出てたるを役人の爲めにめし囚られ、義經の行方を責め問はれたれど、元より知らぬこととて答ふるに詞なく遂に遙々鎌倉まで護送され、囚人として頼朝に見ゆることになつた。然るに頼朝の御臺所政子は静が舞の上手と聞いて、是非其手振を見ばやと頼朝にすすめて再三召し出さんとすれども、静は病と稱して只管之を辭して言ふやう、我身は賤しき婢女なれども、今伊豫守義經の愛妾として忽ち衆人満座の中に出て舞はんこと頗る耻辱と存ずる間、御

免を蒙りたしとて應ずるけしきなければ、政子は頼朝と共に鶴岡八幡宮に參り、静を廻廊に召し出し、今日の舞は人をして觀せしむるにあらず、八幡大菩薩へ奉納の爲なれば、是非に舞ふべしと強ひて命ぜらる。静は今や否むに詞なく、工藤左衛門尉祐經の鼓、畠山次郎重忠の銅拍子にて、先づ一首の歌を吟じ出す、

吉野山峰の白雪ふみわけて

いりにし人のあとぞ戀しき

と、音吐琅々として、泣くが如く訴ふるが如く、紅ゐの裳風になびき、白妙の袖を翻して、或時は春の蝶の花の戯るるが如く、或時は秋の紅葉の風に舞ふが如く、優婉閑雜なる舞姫の姿は下界の人とは思はれず。最後に一段聲を張り上げ、吟じ出したるは、

しづやしづしづの小手巻くりかへし

むかしを今になすよしもがな

と血を吐くばかりの胸中の哀しみを聲にふるはして打かへし打かへし歌へば満座の人々潜に涙を落す。此時頼朝甚だ不興の體にて八幡大菩薩へ奉納の舞なれば關東鎌倉の萬歳を祝すべきに、吾前をも憚らず謀叛人の義經を慕ふ段、奇怪千萬なりといふに、政子は之を宥めて今日の御一言我君の御言とも存せず我君とても其昔蛭が小島に流され給ひしきざみ、妾と偕老を契らせ給ひ、比翼連理の思ひ日に深しと雖も、父上北條殿平家の威光を怖れ給ひ、且つ身に災の及ばんことを氣遣たまひて妾を引き止め給ふと雖も、妾は我君を慕ひ參らせ暗夜に迷ひ雨露を凌ぎて君の所に參りた

るはよも忘れ給ふまじ。又石橋山合戦のきざみには妾獨り伊豆の國に残り、君が敗軍を聞きし時は腸も斷ち魂も消えなんばかりに思ひつる、其哀しさは只今の静が心と少しも異らず。されば永の年月御舍弟伊豫守義經殿の好みを忘れざる静が操、誠に貞女の鏡たるべきか、托て賞翫せさせ給へと諫めたるに、頼朝の心解けて静に纏頭を賜はつた。右の逸話にても知らるる如く貞女の夫を想ふ真情は其心の奥底より迸り出る所なれば自らも之を止めることができぬ。又政子の之に對する同情も止むに止まれぬ心の作用である。

中江藤樹

十三、中江藤樹。中江藤樹が伊豫國大洲にあつて故郷なる近江國高島郡小川村に住める母の身の上を思ひ、日夜に心を安んずる

能はず、何卒して早く故郷に歸り母の側にゐて朝夕不自由のないやうに孝養を盡したいとて、永の御暇を君公に願ひ出ても御許しがないので、止むを得ず、名譽も利祿も皆盡く捨て顧みず、大洲を脱走して小川村に歸る時、家老の佃民に宛てたる書面に、

今度私御暇の儀………二三年前より病者に罷成候次第にて人なみの御奉公相つとめ難き體迷惑に奉存候、一つには故郷の母、十年已來ひとり住を仕罷在候、私の外に別に母をはごくみ可申子も無御座候、又よすがに頼み可申ほどの親類も無御座候、四五年已前より漸漸飢寒に及ぶ體に御座候間、此地へつれ來り可申と奉存候、去る年………迎に參り候所もはや年罷寄、又は病者に御座候而、里の内をも自由に歩き申事不相成體に御座

候、其上女の儀に御座候へば、故郷を離れ遠國へ參り候事、たとへ飢死仕候とも成申間敷と申候故、不及是非捨て置罷歸候、私儀はやしなひ親共に四人迄御座候へ共、三人には幼少にして離れ、今母一人残り申候、母一人子一人の事に御座候、其上母存生の内も、今八九年の體に御座候條………故郷へ罷歸、母存命の間は如何様のわざをたりとも仕り、養ひ申、母相果候へば罷歸御奉公仕度覺悟に御座候

とある。孝子の一念、親を思ふより外に何物もない、威武も其心を脅すに足らず、利祿も其志を誘ふに足らず、榮譽も其心を奪ふに足らず、自らも亦其心を如何ともすることができぬ。これ其精神の奥底より湧出する宇宙的心靈の活動であるによる。

唯孝子貞婦のみ然るにあらざ、忠臣義士等の行爲も同様に止むに止まれぬ心の作用によりて忠を盡し、義を踐むのである。其實例は古今の史上枚擧に違ないほどある。果して然れば道徳は倫理學者によりて種々の理窟をつけて説明せられてあるけれども、眞に吾人の日用に切實なる教訓はひとり禪に於て見出さるると思ふ。

(大正六年十一月一日稿)

衆物必ず表裏精粗あり、一草一木
皆至理を合む

程 伊 川

第六章 禪と日本の家庭

清潔の風

普請の意義

一、禪門清潔の高風。古來禪門にては清潔を貴ひ、衆僧が共同して寺内を掃除する風習で、此掃除には一山の主人たる者が第一に出るといふありさま、一人も残らず此大切なる勤めに與る之を普請と稱して唐代の初め頃から行はれたのである。普請とは普く大衆を請して作務をするといふ義である。禪門の規矩を創制した百丈が常に衆僧に率先して掃除をしたので高德の老師に掃除をさせるのは氣の毒であると思つて百丈の用ふる掃除の道具を見えぬ處へ隠してしまつたと、百丈は其日一日食事をせぬ、何故かと問ふと、

一日不作
一日不食

一日不作 一日不食

と道破したので、此金言が天下に傳唱せられた。百丈は唐代の初期の高僧で、其門下に黄檗が出、黄檗の輪下に臨濟が出て、今の臨濟宗を大成したのである。清潔は生活の第一義であつて、文明と野蛮とは之に依て大略區別することができる。朝鮮人の不潔なることは有名なもので、京城の市街に大小便が氾濫したのは吾人の記憶に新たなる所現に李王の宮庭にては小便を薬にして飲用するので、其小便をする爲に少年が傭ふてあるとの話である。暹羅の都なる盤谷には隅田川のやうな大きな河が流れてゐるが、土人は其中へ多くの不潔物を捨て、又其河の水を飲むことは吾人の實見した所である。

朝鮮の不潔
暹羅人の不潔

東京の不潔

西洋の都會に比較すると、東京のそれは不潔の度が甚しい。水道下水、道路、皆西洋のは衛生的であるが、我國にては全國第一の東京さへ下水は不完全極まる状態、大小便は各戸に積滯せられて、勝手に隣接し、井戸と相通じてゐる。そこで豪雨があつて雨水が氾濫すると、不潔物を流れ出して庭園といはず、道路といはず、肥料を施すに至る。

混浴の不潔

二、日本人の不潔。日本人は毎日洗湯に入て清潔に誇るけれども、浴槽の中で口を嗽ぐ人もあり、眼を洗ふ人もあり、甚しきに至つては小兒が浴槽で排泄物を出すことがある。其れ程でないとしても、麻疹患者も、梅毒患者も、肺病患者も、混浴する湯の中で眼や口を洗ふとは、餘りに亂暴でないか。母親が無知で愛らしい小兒を

浴槽に入れて此危険を犯すのを見れば心ある者は戦慄を禁じ得ぬ。神州清潔の民も是に至て怪しくなつてくる。

西人の良習

西洋人か毎週肌着を洗ひ、毎週シーツを替へ、食堂用のテーブル掛や、ナプキンを毎週浄くして置くのは誠に良習で日本の主婦が學ぶべき點である。都會の人は田舎の人より一段清潔にしてゐるが、田舎の家庭に於ける主婦の惰怠なるに至つては、板の間には鶏の趾跡、椽側には泥足の跡、土瓶茶碗は茶澁だらけ、鍋釜は錆び、飯櫃には手垢がつき、膳には煤が充ち、小皿には味噌が腐り、醬油徳利には微が生じ、糠味噌には蛆が生じ、小供の髪は椶櫚の毛に等しく、着物は垢や脂で光り、縦目は綻び、足袋からは指の頭が出て、下駄の緒は弛み、鼻から二本棒を垂した、豚の子のやうなのが三人も四人も

田舎の陋態

口穢なく罵る母を取圍んで遊びつゝある。か様な譯であるから神州の民の中にも是の如く劣悪なる人々が年々歳々繁殖しつつあるを思へば、何とかして救済の法を講ぜざれば國運の將來が危くなる。

著者の日課

三、著者の實行。不潔と怠慢とは相助けて人格の墮落を來すが故に何人も油断なく戒心せねばならぬ。著者は寺坊に居る時は毎朝必ず自ら掃除をする、即ち十五疊の間、十八疊の間、二十七疊の間、六疊大の板敷及び椽側と玄關、これだけの所を掃いて、雑巾がけをする。是が著者の日課の一つである。一家の主人たり主婦たる者は先づ自ら其家庭を清浄にして香華を佛前に捧げ、禮拜して清浄なる心を以て仕事に當る習慣をつくるが肝要である。食物

主婦の任務

の調理にも主婦自ら手を下して之を監督し、親切と清浄とを旨として食物を調へて貰ひたい。并は第一に佛餉として祖先の靈へ供ふべき食物であり、第二に家内一同の生命を維持すべき大切な食物であるからである。食物の調理には親切と清潔が最大眼目たるを忘れてはならぬ。主婦が此大切な勤めを下女下男に一任して顧みないのは、祖先に對して不孝、夫に對して不貞、子女に對して不親切である。家が清浄なるときは心も清浄となる、居は氣を移すといふ事實を忘れてはならぬ。

食を受くる心得

四、禪門の食物に對する良習。食物に對する吾人の心掛は非常に大切なることで、吾禪門にては極めて懇切に之を教へ戒めてある。先づ食事に當つては、食物を産出する困難と手數とを思ひ、一

食と藥

粒の米も容易ならぬ手數を経て吾膳に上るものなれば勿體ないといふ念を懷き、次に己れは食物を受くるに足るべき徳があるか、食物に値ひすべき行ひをしたか如何と反省して自ら道心を勵まし、次に食物を受くるは饑渴を除くを目的とするので、味の好きを求むるのでない、恰も患者が藥を服するが如くすべきものと觀じて、好き味も悪き味も平等に感謝して受け、次に食物を受くるは佛法を學び佛道を成じて世の人を教へ導くが爲であると念ずるのである。

感謝して食を受く

かく觀念して後に己の得たる食を捧げて上は三寶に供へ奉りて、其恩徳に感謝し、中は四恩の辱きを思ひ、之に供へ、下は一切衆生の恩をも忘れぬやうにと之に供へ、さて愈之を食ふときは一口目

には悪しきことは必ずまじ、二口目には善きこと誓てすべし、三口目には世間一切の人々と共に佛法に依て安心立命を得るやうにと心掛けて食ふのである。是の如き心掛を以て食事をしたなら、食事をするが其儘成佛の行、安心の道である。

中江藤樹の德行

五、中江藤樹の德行。在俗の人にあつても近江聖人といはれた中江藤樹は十二歳の時に食事に當りて、『吾今斯く不自由なく食を受けて飢渴を免るるを得るは一つには君の恩、二つには祖先の恩、三つには親の恩』であると深く感じ喜び、三拜して食されたと傳へてある。僅かに十二歳の少年にして此等の三恩に思ひ及んだといふは偉い者で、吾人は五十六十の春秋の累ねて猶ほうかうかと其日を送つてゐるのみならず、時としては食物に對して不平

一粒米の價

の念を起すことすらあるは恥づべきの至りである。愛媛縣余土村の模範村長として有名になつた森恒太郎君の著書に一粒米の貴きを感じたのが同君が志を立つる基となつたと説いてある。食物を受くる態度に依て人格の如何が測定せらるゝ程のもので、平將門が食物のしかたを見て彼の人物を看破し了つたのは藤原秀郷である。されば吾等の家庭に於ては主人たり主婦たる者が率先して家内の人々と共に四恩に感謝して食事をすゝるやうにせねばならぬ。此一事は子女の人格を爲るに最も肝要なことである。

メソヂスト信者の風

六、利休の風流。著者が米國滞在中、メソヂスト派信者の家に假寓したが、其間家人と共に食前の祈禱を捧げるのは著者の最も喜

びとする所であつた。耶蘇教を全く信ぜざる著者も食事に對して感謝する念は彼等と同一である。此一致點があるから相互に親睦して、樂しき日月を異境に送ることができた。凡そ食物に對して味の善惡を論ずるほど無風流のことはない。或俳人が風流の極意はと問はれて

風流の極意

三度の食事に對して不足をいはぬを以て風流の極意とす
 というたのは千古の格言である。

利休と道安

昔千の利休が子道安、雪の降る日に茶會を催ほして、父の利休に申し入る、利休は道安が方へ行き、路次入りの時、前裁の方を見れば、簀を著、竹笠をかぶり、鍬をかたげ、畑に生ふる菜をほりて、家に入るを見れば、道安なり、扱亭に入りて、茶も濟み、料理出て、利休も

いつくより機嫌よく吸物碗の蓋をとりて見れば、鱸の若菜なり、利休氣色替りて申けるは、先刻路次入の時、イみて見居たる處、園へ出て、雪中の菜を鍬にても、のし、簀笠ひき被りたるさま、さすが風流にありて、深切さいはん方なく、そぞろに面白く興ありて、とかういはれざりしに、鱸の吸物は何事ぞや、總て茶は懇志を盡すを以て第一とす、佗を以て風流とす、ものれ我子にて、かかる辨もなき事あるべきか、不埒至極の者なりとて、散々に叱りける
 と雨窓閑話にある。然れば風雅は懇切なる志が第一で、素朴が第一である、珍味佳肴を列ぬるは却て無風流の至りと知らねばならぬ。一餐に千金を費し、書畫に萬鎰を抛つて得々たる富豪の振舞は寧ろ憐笑すべきである。

七、規律秩序に現はれたる禪門の美風。秩序と整理とは禪門の特色というてよい。朝より暮に至るまで、坐作進退に一定の規矩があつて、鐘鼓磬版の鳴し物によりて幾百人の衆僧があらうとも、軍隊が將軍の命令によつて動く如く、肅々として進退して一絲も紊れず、整然として法式の行はるるは餘門に於て見る能はざる所である。支那の儒者が禪門の規矩の能く整うてゐるのを見て、

三代の禮樂此中にあり

と稱讚したといふ傳説もある。其事の史實であるか否かは保證し難いか規律秩序の正確なるは禪門の誇である。承陽大師は佛祖長上に對する威儀より兩便所に赴く作法まで一々懇ろに御示しになつてゐる。各宗の祖師中此種類の著作は承陽大師に見る

承陽大師の
心切

禪門の規矩

陰德

のみである。故に承陽門下には威儀即佛法作法即宗旨てふ語もできた。勿論形式だけの威儀作法では佛法にも宗旨にもならぬが、精神が透徹しさへすれば此外に佛法のある筈はない。禪宗の高徳が人知れず兩便所の掃除をしたり、履物の紊れたるを直したり、空しく捨てられたものを拾うたりしたのは皆此秩序整理の觀念を實現して所謂陰徳を積んだので、禪門の美風として傳ふべきものである。

家庭整理

八、家庭整理の第一義。日本人の通弊として秩序整理の觀念に乏しく、兎角不規律亂雜となるは歎ずべきである。これは吾々御互が家庭から改良せざれば此大弊を矯正することはできまい。西洋人は日本人より此點に於て遙かに勝れてゐる。著者が英國

バーミンガムに寄寓した時、主婦は無學な女であつたが、家事の整理は行届いたもので、一坪か二坪に過ぎない厨に澤山の器具を洗ひ清めて井然として排列し、牀も淨らかに掃除して塵一つない。されば何物も無駄にならず、衛生に適し、經濟に契つて、非常に心地がよい。家庭整理の第一義は物の置き場所を定むるにある、一旦物の置き場所を定めたなら、三百六十五日必ず其定められたる場所に置いて、之を取出して使用したなら、又本の場所へ必ず戻して置く。厨の事で言へば十能を置く所には三百六十五日十能がある決して外の所へ置きばなし、使ひばなしをせぬ。雑巾桶を置く所には三百六十五日雑巾桶は洗つて覆せてある、決して外に持出して使ひばなしにせぬ。小皿を置く所には三百六十五日小皿が洗

物の置き場

つて置いてある、決して小皿を用ひばなしにしてない。紙屑を入れる籠には必ず紙屑を入れて一定の所に懸てある、決して紙屑を丸めて牀の上に捨てない。そこで厨の整理ができて物の紛失することもなく、必要な時に物の見當らぬ氣遣もない。

不規律の家

九、不規律なる家庭。然るに主婦に此考がないから凡ての物が使ひばなし、やりばなし何が何處にあらうとも委細かまはず。三百六十五日一定の所に一定の品物があるどころか、一日の中に品物が幾度も位置を換へて、行方不明となる。それ赤坊の足袋が見えない、小供の手袋が無くなつた、主人の羽織が紛失したと騒ぎ廻る。毎日毎日物品が位置を換へて、今日鍋のあつた所に明日は飯櫃が置いてあり、飯櫃の置いてあつた所へ其次には雑巾桶がある。

雑巾桶があつた所へ其次には猫の椀がある、猫の椀のあつた所へ其次には赤坊のあしめがあるといふ始末である。そこで不潔で不経済でいざといふ時間に合はぬ。

是の如き主婦の陋習は自然に子女をして不規律の習慣に馴れしめ、第二の不規律なる母を養成する。故に主婦や主人が規律と整理とを實行して子女をして自然整理に馴れしめねばならぬ。例せば學校に行く小供があるとすれば其書物でも筆墨でも、一定の所に置かじめ、歴史は歴史、地理は地理、修身は修身、ノートはノート分類して整理する習慣をつけるならば子女が他日事業に當る時の素地となる。子供の時より此の如き習慣が養はれてないから成人しても不規律亂雑で、事業の經營に任ずることができぬ。

家庭に於ける子女教育

家庭の悪習が大人に及ぼす結果

日本人は大學を卒業した人でも、高等商業を卒業した人でも、往々事務上の錯誤を生じたり、書類などを使用して使用しなにしにしたりして、混亂を來すことがある。西洋人は無教育のものでも此弊が無いと或商人がいうたが、如何にもさうであらう。日本の家庭には整理の習慣を養ふやうな良いのは實に少いから、不規律の弊習が何處までも残るのである。

脚下を照顧せよ

十、脚下を照顧せよ。禪宗の寺院には履物を脱く所に大低「照顧脚下」と記してある、これは履物の亂雑にならぬやう脚下に注意しろといふのである。禪宗の規律と整理とは此所にも現はれてゐる、家庭の整理も履物の脱ぎ方から改良してかからねば駄目である。家庭が亂雑であつても、小學校で規律的に教育して呉る

小學校教員の欲點

なら、幾分か之を補ふことができるとは、小學校教員も亦非整理的な家庭で生長したもので、同じく整理の考の無い人が多い。著者が日本で有名な小學校の一を參觀した時、其圖書館に入つて見ると少しも分類せずに澤山の書物が戸棚に入れてあつたので、困つたことだと思つた。百冊や二百冊の書物なら分類もなく、目録も無く、差支なからうが、數千部の書物を亂雑に入れて置いたのでは、必要の時に見出すことができぬ。是の如く教員に整理の頭がなく、如何して生徒を規律に慣はしめることができやう。脚下を照顯して教員諸君が自ら脚下に氣をつけて貰ひたい。又或教員夫妻の如きは夫婦共に教員であるが家の中一ぱいに物を取散して足を容る餘地もないやうにして置くのを見たことがある。多く

の小學校教員が斯く亂雑の弊を免れずして範を生徒に示す力の無いのは國家の不幸と謂ふべきである。

不規律なる時間

十一、禪林の規律と時間の嚴守。禪林の規律は時間を嚴守するを命ずるもので、晨起夜臥自ら一定の時間を以てする、此規律を吾人の家庭に行つたなら日本時間と西洋時間の別などは無い筈である。小學校の生徒が登校するを見るに二時間も三時間も授業開始前に校庭に集るのがある、さうかと思つたと授業開始に後れるのもある、全校の生徒が一定の時間に登校する規律がない。小學校時代に二三時間も早く登校した生徒が卒業後青年會に出席するには最早一時間位の遅刻をするやうになる、更に生長して戸主となり、集會に列席するときは二三時間の遅刻となつて、小供の時

の早過ぎた時間を差引するのである。これが日本全國到る處に行はれてゐる不規律の弊習である。處によると町村中の重なる人で旦那と呼ぶる人々は集會の時は二三度迎へを受けねば御み腰を上げない慣例もある。

社會の指導者たる人々例へば教職にある人人の集會にさへ時間
が不規律であるは大いに非難すべきことと思ふ。日本で有名な
禪僧が米國から歸つたとき、其歡迎會があつて上野の寛永寺が會
場で、午後一時開會といふ通知が來たので、著者は埼玉縣の田舎か
ら時間を計つて一時間前五六分頃幸うじて到着した、大いに遅刻し
て申譯がないと思つて大いそぎに會場へ入ると來會者は著者ま
で入れて僅か三名で、大書院は無人の野の如く廣くあいてゐた。

所謂上流社
會の惡風

それから一人二人づつ集つて二時頃になると歴々の人が見える、
さあ開會といふのは二時半頃であつた。此時の會衆は多少朝野
に名の知れた官吏、新聞記者、實業家、教員、學者、僧侶といふ連中で、時
間勵行の主唱者のみであつたが、此體たらくて、著者は心中大いに
慚愧したのである。凡そ時間に規律のない町村に好い町村はな
いといふが事實であるとすれば日本全國の基礎たる町村は頗る
墮敗して憐むべきものと謂はねばならぬ。

十二、枯淡なる禪風。禪僧の生活は古來極端に枯淡で、艱難に耐
へる習慣を爲つたものである。建仁寺の榮西が或時衆僧に與へ
る食物が盡きはて、一週間も絶食のありさまであつた所幸ひ施主
があつて絹一卷を喜捨したので衆僧は大いに欣び、絹を以て直に

枯淡なる禪

食物に代へ枯腸を醫することであらうと豫期してゐた。すると一人の貧民が来て榮西に救を求めたので早速其絹を與へてしまつた。衆僧は飢ゑに耐へ兼ね不平の氣が自ら生じてゐると又一人の貧士が来て施與を乞ふた榮西は最早與へる物がないさりとて無情に其請ひを斥けることはできぬ止むを得ずして新たに作つた藥師如來像の後光を取り出して之を破毀して其地金を與へられた。貧士が歸り去つて後衆僧は榮西が佛像の後光を潰したのを見てゐるから早速方丈に上つて詰問を試み如何に人を救ふがためとはいへ佛像を破毀したる大罪は免れ難いてあらうといふと榮西は汝等のいふ所已甚誤まれり佛は一切衆生を救はんが爲には粉骨齏身も厭ひ給ふべきにあらず況や後光をやと喝破し

榮西と衆僧

た。衆僧は之を聞いて大に愧ぢて不平の氣も散じ修行に憤勵したと傳へてある。妙心寺の關山も極貧に安んじ雨漏の激しきに泰然として其中に安坐してゐたことは禪林の一佳話となつてゐる。

十三、法の爲にして身の爲にせず。龍牙の語に

龍牙の語

學道先須且學貧 學貧貧後道方親

というた如く貧中の味を知らぬ人は道を語るに足らぬ。正法眼藏隨聞記に

宏智の高風

宏智禪師の會下天童は常住物千人の用途なり然あれば堂中七百人堂外三百人にて千人にもなる常住物なるに好き長老の住したる故に諸方の僧雲集して堂中千人なり其外に五六百人あるなり知事の人宏智に訴へて曰く常住物は千人の分なり衆僧

多く集りて、用途不足なり、狂けて放たれんと申し、かば、宏智曰く、人々皆口あり汝が事にあづからず歎くこと莫れ

とある、我國にては風外の會下に衆僧が多く集つて常住の食料に窮した時、典座を勤めてゐた奕堂が此事を風外に告げて雲衲の掛搭を止めては如何と提議した。時に風外は舌を出して吾に舌があるかと問ふ、舌があると奕堂がいうと、舌があれば食ふに差支ることはない、心配するなと謂ふた譚がある。皆法の爲にして身の爲にせざる古人の勝蹟で寔に欽仰すべきである

十四、一草一木も佛徳を具せざるなし。同書にまた、

宋の禪院に麥米をそるへて悪きをさけ、善きをとりにて飯等にすることあり、是れを或禪師の曰く、直饒我頭をうち破ること七分

一草一木も佛徳たり

にするとも米をそるふることなかれと頌につくり戒めたり：
：只有るにしたがひて、よければ善くて食し、悪きをも嫌はずして食すべきなり、味を以て善悪を擇ぶこと勿れと謂ふなり
とある、一草一木も佛の功徳なくして生じ來るものはないから好きも悪しきも一樣に感謝の念を以て受くべきである。承陽大師は一莖菜を拈じて丈六の金身となせと仰せられて一莖の菜をも丈六金色の佛身の如く大切にし尊重せよといふのである。同書にまた、

故僧正(公胤)云く、衆僧各所用の衣糧等の事予が與ふと思ふことなかれ、皆是諸天の供する所なり、吾れは取次人に充りたるばかりなり、……吾恩と思ふことなかれと、是れ第一の美言と覺ゆ

施者受者皆
佛恩による

とあつて、如何にも一切の物皆佛徳の催ほす所なれば與ふる人も只取次人となるばかりで施す者も施さるる者も等しく佛恩に浴するのである。

十五、梅は寒苦を経て清香を發す。禪門の諸師が能く困苦を凌ぎ艱難に堪へたことは枚擧に違がない、今一例だけを擧げやう。

浮山遠の行
持

昔浮山の遠、天衣の懷衆と同じく葉縣の省に參ず、共に七十餘人なり、省一見して即ち呵して曰く、汝が輩、州縣を踏むの僧、此に來て何か爲ん、我那ぞ間飯の備、開漢を養ふ有んやと、之を叱して去らしむ、衆爲に動かず、遂に水を取て之を潑く、衆又散ぜず、復灰を以て之を撒く、衆皆怒りて捨て去る、唯懷遠二人のみ端坐して

故の如し、省曰く、彼皆去る、爾何が故に去らざる、遠曰く、久しく和尚の道徳を慕ひ千里を遠しとせずして來る、豈一杓の水一把の灰に因て遽かに即ち去らんや、省曰く、爾二人は既に眞に佛法の爲にす、此間に典座を缺く、能く之を爲さんや否や、遠曰く、弟子願くは爲さん、懷參堂するを得たり、一日省他出す、衆枯淡に堪へず、佳粥を煮んことを乞ふ、遠因て六和粥を爲る、粥熟して省還る、共に堂に赴き、竟に召して知事に問ふ、今日施主の齋を設くる有りや、答て曰く、無し、堂中襯を納るや、曰く、無し、此の如くなれば即ち粥は何に従り得る所ぞ、曰く、典座に問へ、是に於て遠、自首して曰く、某甲大衆の枯淡を見て、實に之を爲る、省曰く、爾此の如く好んあらば、他日住持たる時を待て、之を爲すも、晩からず、何ぞ私に常

住物を盗んで人情を做すを得んや、知事をして遠の衣鉢を估らしめ、値ひ幾何、悉く之を常住に歸さしめ、遠を逐ひ衆を出でしむ、遠懇ろに求むる再三、皆之を允さず、轉じて諸山の尊者、並びに檀越を求め、掛搭を求めんと乞ふ省大いに怒て曰く、我は道ふ、爾是れ好人にあらず、汝勢位を以て我を壓せんと欲するや、速かに去れ、遠曰く、此の如くなれば、則ち掛搭は敢て望まず、但上堂の時、某が一人たび法を聴くを容せ、省始めて之を領く、遠山下なる他寺の廊房に寓す、省一日之を見て曰く、爾此に住する幾時ぞ、曰く、已に半年、曰く、常住に房錢を還すや、否や、曰く、無し、曰く、此は常住の房なり、爾何ぞ敢て盜住するや、速に須く他を還し去るべし、爾らざれば、我當に官に告ぐべし、遠即ち化して之を與ふ、而して別に城

中に居る省を見る毎に、則ち轉た敬容を加ふ、是に於て省山に歸り、衆に告て曰く、葉縣に古佛あり、汝等宜しく之を知るべし、衆曰く、古佛とは是れ誰ぞ、省曰く、遠公の如きは、眞に古佛なり、一衆始めて驚き、盛んに香華を排し、城に入て廻歸せしむ、省特に上堂し、面のあたり佛法を付す、古へより今に至るまで、法堂にて付法せらるゝは、遠一人なり

と慨古録に見ゆ。梅は寒苦を経て清香を發すとは、遠の如き人をいふのであらう。

山鹿素行の詩

十六、古人貧に處して清節を全うす。山鹿素行の詩に
 天空海濶小茅屋、四序悠悠春色長
 笑殺淵明無卓識、北窓何必慕穢皇

とあり、又

有井無田貧亦極 纒支伏臘意悠悠

平生不作顰眉事 直以百年當一遊

とある、大丈夫たるものが貧に處するは必ずしも結構なことではないが、只不義の富を望まず貧に處して憂ひず悶えざる所に丈夫の操を見るのである。されば吾人の家庭に於ては成るべく子女を不自由に馴れしめ、艱苦を凌ぎ得るやう躰けてやるが親の情である、日本文明の恩人福澤諭吉の如き貧家に生れ、困苦の中に人と爲つたことは人の能く知る所である、彼は一家の學を唱へて先生と呼ばれるやうになつても米を搗いて運動に代へたのである。陽明學の泰斗東澤瀉も

福澤諭吉米を搗く

誦畢離騷米使精

の句があるから、米を搗いたらしく、吉田松陰も自ら米を搗いて、安政五年六月廿八日に久坂義助に與ふる書に記して、

吉田松陰も亦米を搗く

隔日左傳八家會讀、勿論塾常居七つ過會讀終る、夫より畠又は米搗與在塾生同之米春大得其妙、大抵兩三人同じく上り會讀しながら春之史記など二十四五葉讀む間に米精け畢る亦一快なり

といてゐる、かくてこそ身心二つながら鍛鍊せらるるなれ。

禪僧と武士

十七、禪僧の武士的風格、吾禪門が北條足利の時代に日本國中に弘まつたのは武士の氣象と禪風とが相似た點があるから、昔の禪僧は何となく古武士の風格を帯びてゐた。元祿の頃化門を張つた盤珪の如きは千住に來て罪人の生首を露してある所で夜

中坐禪して心膽を練つたと傳へてある。されば槍術を以て自慢した或大名が白刃を揮つて盤珪の面前に突きつけたのを、珠數を以て拂ひのけ、其用心の未熟を罵つた位である。安藝の物外の如きは、劍術柔道馬術にまで達し、無雙の強力であつたが、勤王の志が深く、和宮様御降嫁のとき、朝廷の衰運を歎いて、

桐一葉落て天下の秋を知る

と吟じ、更に勤王の志を述べて

雲の上も君のみ國や富士の山

と口占んだ。武士と禪僧とは離るべからざる關係を結んだもので、武士道が禪に負ふ所あるは勿論である。

義 國民皆兵主

十八、國民皆兵主義の家庭。吾國は今後國民皆兵主義を實行せ

乃木將軍の家庭

ねばならぬのであるから、家庭から改良して武士的ならしむる必要がある。武士の家庭は何れも嚴格で親子夫婦の間も、親んで狎れぬところに妙がある。親んで狎れぬから親や夫の威嚴が保たれ、妻や子も我儘もせぬやうになる。此美風が家庭の和樂を増し、家人の風儀を善くするのである。乃木大將は非常に嚴格なる家庭で人となり、自らも亦嚴格なる家庭の主人となられた。大將の家では主人夫婦より下女馬丁に至るまで同一の食物を喫して、少しも差別がなかつたといふ、かやうな家庭で生長する男兒は軍人となつて多數の將士と苦樂飲食を共にする素養を得るに相違ない。國民皆兵主義を實現する爲に各學校で軍隊教育を加味し、體操は凡て現役の士官に教へさせ、中學を卒つた者は下士とし、高等學校

や大學を卒へた者は、將校にしたら宜しからうといふやうな議論が教育家によつて唱へられてゐる。それも結構なことかも知れぬが、吾人は日本の家庭を武士的にして、古武士の精神を小供に持たせる工夫が大事であると思ふ。

武士の氣節

十九、武士の氣節。本多彈正少弼忠籌が幼少の時山へ遊びに行かれて歸るさに、或庄屋方へ立寄庭に菘をしかせ、其上にて田畑を見晴しながら辨當をつかはれた所、土地の庄屋名主組頭等も皆其傍に来て世話をしてゐた。其時忠籌が食ふ所の飯一粒、土の上に落ちたるを拾ひ上げ、戴きて之を食されたので、皆々感じ入つて賛めぬ者とは無かつた。大名に是の如き心掛けがあれば、國富み兵強くなるは自然の勢である。

森家の侍に喜多見某と云ふ者あり、貧困にして、後には焚く物なく、家の柱竹の簀子迄も焚きける、妻も離別し、一子は寺に托し、一人にてくらし、生木を柱として、塀へさしかけし、其中に居人に逢はず、餓死したり、檢使之を見るに、塀の下に竹釘して、鎗を掛け、金紋の付たる立派の鎧櫃にもたれ、大小を帶して死したり、其鎧櫃を開き見るには、なやかなるおどしの鎧一領、軍用小判百兩あり、腰の物は革柄にて眞黒によごれたれども、身は氷の如く研立て、大和の來が作とやらん、百枚の折紙附の由。喜多見某が經濟の道に疎くして、餓死したるは笑止なるが如く見ゆれども、其氣品の高潔にして、士道を重んずるが爲に甘んじて窮境に陥り、百兩の軍用金を其儘にして、餓死したる精神は貴ぶべく

敬ふべきである、此の如き精神が日に月に消磨し去るは國本を危くするの第一である。畠山重忠が源頼朝の不審を蒙つて偽りなき旨の記請を差出すべしとあつたとき、我一生僞を云ひしことなし、此事に限りて起請を書くべき理なしとて命を可かなかつたことは東鑑に見えて有名な譚である。男子の一言金鐵の如しとは此ことで、日本人として此氣象のない者は日本人でない、日本に住する外國人である。外國人では日本の將來を托することはできぬ。

古武士の信

二十、禪的信仰と家庭訓。昔の武士が信仰を重んじたことも吾人の注意すべき點である、北條泰時の貞永式目の發端に

一、可修理神社專祭祀事

一、可修造寺塔勤行佛寺等事

とあり、北條早雲の家訓にも

一、第一佛神を信じ申すべき事

とあり、土佐の長曾我部元親の百箇條にも

一、諸社神事祭禮等從先年如相定不可有退轉事

一、諸事勤行等如有來不可有懈怠云云

とあるにて、知れる如く、神佛を大切にすることが日本人の日本人たる所以である。然るに東京の人などは多く佛壇も設けず、神棚も置かず、信仰の標的を失つてゐるは哀しむべきである。著者は嘗て禪的信仰を本として左の如き家庭訓を作つた参考の爲め茲に數條を摘録して置く。

一、天地の間に生きとし、活けるもの、たれか御佛の子にあらざらん、まして我等忝なくも人身を受け親しく正法に遇ひ奉るをや。

一、我等の衣食住は謂ふもさらなり、我等は佛の御恵を受け佛の御心を具へて人と爲れり、此限なき御恩如何にしてか報い奉るべき。

一、我等は此御佛を釋迦牟尼佛と申し奉る諸佛菩薩數多ましませども皆此御佛と一體にておはしますなり。

一、我等の父は限なき佛の御智慧の一分を受け、我等の母は限なき佛の御慈悲の一分を受けて、我等を生み且つ愛みたまへり、故に父母の恩と御佛の恩とは同一にして異なる所なし。

一、君主の恩、師匠の恩、朋友の恩、皆佛恩の一端なれば、何事も皆其報謝とのみ心得べきなり。

一、我等毎朝佛前に於て、南無釋迦牟尼佛と幾度も唱へ奉りて禮拜恭敬し、修證義の一節を讀みて、再び佛號を唱へて禮拜すること、暑さにも寒さにも渝るまじ、これ萬分の一の報恩ならんかし。

一、我等毎朝御佛を拜し奉り、我身の恙なきを得せしめたまへるを喜ぶべく、假令身に病ありとも、今日一日の生命を得せしめたまへる御恩を感謝すべし。

一、我等毎朝御佛に新しき御飯を供へ奉りて後に、家内の人に食を侑むべし。

一、我等飯を焚き菜を調ふるには淨き心惻ろなる志を運ぶべし、开は此飯と菜とは御佛る奉るべく、父母にまゐらすべく、一家の人々の生命をつなぐべきものなれば、我等が最も貴ぶべき勤めの一なり、必ず下人にのみ任すまじきなり。

一、清淨は御佛の妙徳にして、我等が身を衛るの第一なれば、身體の清淨は更にも言はず、家屋の内外を能く掃除して御佛の功德に遠からざるやう心掛くべきなり。

一、我等三度の食事に對して敬意を盡し、佛號を唱へつつ合掌して頂戴すべし、其味の美なるには喜ぶべく、其味の足らざるにも悦ぶべし、皆佛の賜なれば好惡の念あらんは勿體なき事なり。

一、我等祖先の命日を忘るべからず、或は墓參し、或は佛前に禮拜供養して恩徳の有難さを感謝すべし。

一、我等無益に物の命をとり、又は畜類を苦しめざるやうに心掛くべきなり、凡て生ける物は皆佛の子なることを忘るまじきにこそ。

一、我等神佛の前を通らん時には、必ず低頭して敬ひの心あるべし、人の前を通るだに會釋するは人の道なり、まして神佛の御前をや。

一、我等互に睦うするこそ善けれ、同胞の相争ふは父母の心を痛ましめ、御佛の教に悖るなり、いかで深く慎まざるべき。

一、我等の用ふるもの一紙半錢と雖も、皆御佛の賜ならぬはな

し之を疎略にせざるは人の道なり假令我衣服調度なりとも誤つて足にて踏みたらんには額にあてて戴きしてふ古人の美談もあるぞかし。

一、我等父母又は他の人より與へたまはる物あらば必ず戴きて之を受け其幾分は御佛に供へ奉りて貯へ置き決して全分を費すまじきなり。

一、御佛は一衆生をも捨てたまはず故に我等も不用の物なりとも空しく棄ずして後日の用に供すべし。

一、我等父母より賜はりたる手あり足あり何事も自ら爲さしめんが爲なりざるを己れは手を拱きて人のみを使はんとするはこれ不孝の第一なりと知るべし。

一、我等の心は御佛の心我等の身は父母の身なりされば我物と思ひ怒り恨みて佛の心を汚し又は酒色に耽りて父母の身を傷むべからず。

一、我等士農工商其務を異にすとも業に高下の別あるなし力を盡し業を勵まんこそ誠に佛に事ふる所以なれ。

一、我等身のほどに應じて學問怠るべからずされど學問して名を揚げんと志すは邪なる心にて淺まし身を修め徳を樹てんことこそ願ふべきなれ。

一、奉公の事慈善の事に従ふは御佛を供養し奉るの第一にて其悦びたまふこと亦之に過ぎたるはあらず。

一、我等寢る時には御佛に對して今日一日恙なかりしを感謝

し、深く自ら省みて悪しきは再びすまじ、善きは猶ほ行はんと誓ひ奉るべし。

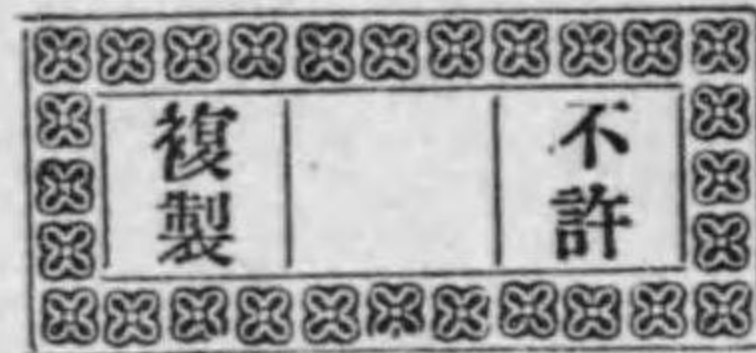
一、我等衣帯を正しくして寝ね、夢にも御佛の妙相を見奉らんと願ふべし、寢亂れたる姿は人に見らるるさへいと耻かし況や暗きをも照したまふ佛の看護りたまふをや。

(大正六年十二月十九日草)

大正七年二月十三日印刷
大正七年二月十五日發行

禪の理想と新人生の曙光

定價金壹圓貳拾錢



著者	忽滑谷快天
發行者	東京市芝區三田功運町十二番地 佐藤幹枝
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

(刷印社會式株刷印協三)

發行所

東京市芝區三田功運町十二番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂書店

東京高等師範學校教授 鹽谷榮先生著

英詩英文の賞玩 そとろあるき

原著者肖像十數葉挿入
定價 金壹圓
送料 八錢

本書は鹽谷先生が、ヴァンダイク。シエレー。キツプリング。キーツ。ヂッケンズ。テニソン。サツカレ。ミルトン。ポー。ユリッヂ。ハーデー。等の文豪詩聖の作品を翻譯し、且つ燃犀の批評眼を以て縦横に論評を加へられたるものなれば。單に名篇玉作を味ふを得るのみならず、解釋力と批評力とを併せ養ひ得べき快著なり。

東京外國片山寛先生 エーラドオフ 高橋清三郎先生合著
語學校教授

英語の作文

定價 金八拾錢
送料 金八錢

本書特色 (一)大抵の英作文書又は和文英譯法は英文の組織に偏するか、題目の配列に偏するか二者の中一である。然るに本書は此の兩面を合せ有して居る。(二)一編に於て英作文に必要なる型を五十五章に分ち各章平均して七題の練習を與へたる事。(三)二編に於て各種の問題を題目別に配列し更に新方面より練習せる事。(四)三編に於て簡單なる記事文論文等の練習をなせる事。(五)易より難に入る仕組なるを以て前編の初めより學べば初學者と雖も英作文に熟達するを得。(六)問題總數約七百題。

325

277

終